

人と意見

岡山畜産便りも高校生に!!

社団法人 岡山県畜産会会長 惣津 律 士

岡山畜産便りが発行されてから本年で 15 周年を迎えることとなった。私が本県に赴任した年に創刊号が発行されたのを覚えている。この編集にあたられた県畜産課の各位の熱心な御努力が、今日まで継続せしめたといっても過言でない。県の畜産行政の大要を県内はもとより県外の方々によく知って頂く意図の下に発刊された小誌が、15 ヶ年間になしとげた業績はけだし意義深いものがある事を確信している。

現在は発行先が畜産会に変わったが、昔なつかしい表紙を見て、ページをめくる度毎に、ほのぼのと血のかよう同人雑誌の暖かさ、なつかしさを感ぜ、心あたたまるものを覚えるのは私 1 人ではあるまい。

硬からず、軟かからず、随筆あり、研究論文あり、人の消息あり、繰り返して読み、静かに移り行く畜産の姿を思考せしめる雑誌であると思っている。

しかし、会員各位から言わせると、数多くの注文があると思うが、年と共に内容が精練されるであろう事を期待して戴きたい。

私にはこの 15 ヶ年はアツという間に過ぎ去ったように思われるけれども、我国の農業の変遷、畜産の移り変りは異常なものがあつた。発刊当時の本県の畜産地理と現在のそれは大変な変わりようである。

特に最近のめまぐるしい経済のテンポの中で、成長産業の花形とさえいわれ、期待されている畜産が、内面的に不安定な要素をもちながらも、開放経済の渦中に勇ましく突進して、それを乗り越えようと懸命に努力を払っている姿を当時誰が想像し得たであろうか。まことに隔世の感がある。今や農家の高度生計水準をめざして農業の構造改善事業が国及び県の強力な指導援助のもとに推進されて、畜産の基盤整備が着々進んでいるこ

とは御承知の通りである。

大草地に新鋭機械が活躍し、有畜農業という言葉がいつとはなしに消えて、多頭羽飼育、協業経営、されは畜産団地の形成という

言葉が登場し、最近ではアグリビジネス即ち企業化農業、企業化畜産にまで発展しようとしている。農村人口の都市工業地帯への移動が年と共に積極化し、畜産の階層分化が現われ、少数ではあるが、新しい畜産の息吹きが各所に見られるようになった。

一方流通部面において、特に生乳取引について見ると、生産の伸びはさる事ながら、消費の伸びはめざましいものがあり、生乳による学校給食は世論に依って、たくましい伸長を示そうとしているが、乳価についてはここ 2、3 年来、1 県のみでは片付かず、県の範囲を越えて、国とか、地域の範囲でないと解決し得なくなって来た。この事は畜産物全般を通じていえる事であつて、こうなると、現在の行政機構を何んとかしなければならぬように思われ、広域行政の必要が生じて来たようだ。いやはや大変な事になった。

和牛の技術者がいつの間にか酪農の指導者になることを余儀なくされる指導体制は致し方ないにしても、県の畜産技術指導機関である試験場などが、時代の動きに対処しての整備がどしどしなされてしかるべきであろう。団体においてもそうである。総合農協がどうの、専門農協がどうのと騒いでいるが、組織いじりよりもまず己れの体質の改善が先決だ。

最近では足元がどこもここもぐらついており、神



岡山畜産便り 1964.10・11

経衰弱症患者が横行しているような気がしてならない。留意すべき事である。

私は今こそ生産改良から流通消費まで一貫した施策が講ぜられる畜産経済圏の建設が必要であると考えている。そしてその目的達成のために、国、県はもとより団体、農家、取り引き会社、さては消費者が夫々の分野において責任を果す体制を確立したいものである。こうなるとこの圏内に実力をもった畜産農家がどんどん誕生するであろうし、そういった農家による組織が明日の畜産を動かす中心指導力となるであろうことを私は夢みている。

ここらで新しい畜産経営方式が出来てよいと思う。私は抜本的な畜産施策を強く期待し、それに参加する場合においてのみ情熱を捧げる決意をもっている。